

中国における祝儀と香典に関する一考察

— 遼寧省農村の事例を中心にして —

孟 憲晨

**A Study on gift-money and condolence money in China:
A case of a farming village in Ryounei-sho**

Xianchen MENG

Abstract

The study is about the gift-exchange of gift money and condolence money called “*zuirei*” in China. I will discuss on reciprocal factors which exert influence on people’s reciprocal activity and the consciousness of practicing *zuirei*, the features and the impact on household of the balance of gift money in *zuirei* relationship in a farming village in China. In conclusion, I will point out that the balance of gift money constrains the production and consumption of household, and that it has also an influence on the decision making of important family issues. Also I will argue that concentrative back-flow of gift money has a function of improving situation of the household money management.

キーワード：香典，祝儀，互酬性，現金の贈与交換，返礼の等価性

Key Words : condolence money, gift money, reciprocity, gift-exchange of money, equivalence in return

1. はじめに

中国では、冠婚葬祭が行われる際に、贈り物あるいは、日本の祝儀や香典にあたる「礼金」¹を贈ることが慣例になっている。その慣習は中国で「随礼」と言う。中国農村の生活世界を垣間見ると、随礼は農村生活の現実の中で、常に話題の一つである。随礼は、農村住民の社会生活の節々に関与し、「人間関係」²を形成・維持する一つの重要な手段となっている。故に、近年の随礼の貨幣化や礼金の金額の年々の上昇を人々は軽視することができなくなった。随礼における礼金の授受は、いわば、「現金の贈与交換」に外ならず、当事者間には、等価性が強く

1 「礼金」とは、祝儀や香典を行うときの祝い金と慶弔金などをいう。

2 中国において人間関係は、面子を媒介に「関係」のネットワークが広がるが、これは個人を中心としているために外からは観察しにくいといえる。しかし、この関係を通じて莫大な社会資源（コネその他）が流通し、人々は個々人との親疎の度合いによって異なる行動をとることが期待されている。血縁や地縁など「親」の感情が生まれやすい環境では「助け合いの精神」が前提とされ、それ以外の「疎＝没関係」の環境では、熾烈な競争が生じやすい。

意識され、履行できない場合は様々な問題や軋轢が生まれることになる。このように、随礼の研究は、文化人類学的には贈与交換の研究³に位置づけることができるが、従来の研究と大きく異なる点は、それが「現金の贈与交換」であることから発生する「返礼の等価性」の問題にある。

以下では、まず、随礼とは何かについて説明し、そのあとで随礼と贈与交換に関する先行研究を行ない、本研究の位置づけを試みたい。

2. 随礼と礼文化

「随礼」という言葉について、新しく出版された中国の「現代漢語辞典」では「贈り物をする集団へ参加すること」(2005:1306)という説明がある。随礼の「随」とは、「跟从」(つき従う)及び「跟随」(後につき随う)の意味があり、ここに随礼の「随」に関するもう一つの重要なポイントがある。中国の社会学者で農村の随礼に関する研究がある尚会鵬によれば、「随礼集団に参加する人々の中に親族と非親族の参加が必要だ。もし、その中に親族がいなければ、随礼とは言えない」(尚 1996:108)という。しかし、近年の随礼への変化の趨勢から見ると、農村部においても、随礼は非親族間だけでも行われるようになり、必ずしも親族の参加を随礼ととるのは一般的でなくなっている。

次に、「随礼」の「礼」の意味について見てみよう。随礼慣行の根っこをたどると、孔子や儒家の「礼」の思想にたどりつく。鄒昌林は『中国礼文化』(2000)の中で、中国文化の根本的な特徴は「礼」であり、「礼というのは、そもそも人類の原始時代からの風習である。当時の人々の生産、生活、慣習、信条、経験、知識の蓄積などは、すべて、この「礼」文化とかわっている」(ibid.:21)という。この点に関して、李沢厚は、孔子が推進した「周礼」⁴を説明するときに、「それはすべての氏(宗)族の成員に極めて大きい強制力と拘束力を持ち、後世の法律に相当し、実際は一種の未成文の慣習法である」(2003:32)とし、現代社会の「礼」に潜在する規則や方法の源を示した。また、随礼を行うにあたり、外在的規範などからの制約をうけるよりも、むしろ、人々の心に内在する要求や生活理念、あるいは直接的感情が影響しているため、返礼しないということは、「人情」がわからないという心理的苦しみを伴うことを意味する(馬・李 2004)。

上述のように、中国の随礼の中の基本的文化概念としての「礼」は、今日でも中国の広大な農村の社会生活の多方面に影響を及ぼしている。随礼は、都市と農村の区別なく、社会生活の中の一つの基本原則になっていて、随礼をしないことは恐ろしいことでもある。随礼からくる精神的プレッシャーは、人々の悩みの一つとなっており、随礼を通じた関係は個人や家庭を取込み、抜け出すことが困難にさえなっている。

3 本研究が注目するのは、ある地域(集落)の集団における家庭間の贈与交換における随礼行為である。

4 周礼や礼記、儀礼ざらにも孔子以降の作とみられる。周礼には、日常の立ちいふるまいの礼儀法や冠婚葬祭の儀礼、さらに国の王朝儀礼などについて書かれている(孔子家語を参照)。

3. 先行研究

3.1 「随礼」に関する先行研究

これまで中国の贈答および随礼について研究してきた学者たちは、そのほとんどが「互酬性」や「社会関係」の視点から「人間関係」や「関係ネット」⁵、「互酬的交換」などに注目してきた。この中で、中国社会の贈与交換⁶に関する重要な研究として、閻雲翔の『贈り物の流動』(2000)がある。閻は中国北部地方(黒龍江・下岬村)の農村部の調査を通して、中国農村社会の贈り物と商品の関係に注目し、中国社会の「面子」⁷、「人情」⁷、「関係ネット」などとの関連で、贈与交換の特徴を以下のように指摘した。

第一に、「互酬性」の原則は、中国の贈り物の交換システムにおいても重要な役割を有する。長期的視点から見ると、ほとんどの交換関係は互酬性で維持されたが、一方で閻の調査地の下岬村の状況は互酬性の原則に反したのもあった。その背景には、互酬性の多様化があり、贈答の多様化によって、礼金の流出と流入は、形式や数量等においてバランスがとれていないことが一因としてある。互酬性の欠如、即ち、階層や地位的等級の違いにより、上級の人が下級の人からの「贈与」に対して「返礼」しないことなどがあげられている。

第二に、中国では、贈り物にはモースが『贈与論』で指摘したような「霊」は入っていないが、贈り手が、贈る相手に持つ関心や道徳的配慮、心情などの精神的な何かが伝えられる。贈り物は、人と人の間に精神的結び付きをもたらし、「モノ」で「人情」を伝えることになる。

第三に、「関係ネット」が贈与交換で実現する。贈与交換の過程では「人情」に従わなければならない、長期的な関係は双方からの贈り物を通して表現される。また、ある種、義務的な贈与と返礼の行為は、農村住民に「関係ネット」を生み、維持、拡大させる基本的なやり方である。

閻は、『贈り物の流動』において、中国北部地方の農民の贈与交換のあらゆる面に随礼の原則や特徴が存在することについて論述しているが、随礼行為の中の礼金の経済的側面についてはほとんど関心を示していない。

次に、陳建功は、その著『礼帳と森林区住民の社会ネット』(2008)の中で、森林区住民の随礼行為の機能について解明している。陳によれば、贈り物から礼金への転換は時代の大きな流れである。彼は、また、随礼の中で、「贈与」と「返礼」の両方のバランスを保つことの重要性について述べている。しかし、陳は、礼金の流動の裏にある意味深い「随礼の長期的サイクル」についてはほとんど注目していない。

5 「関係ネット」とは、血縁、地縁、社縁などの社会関係における関係を指す。

6 随礼行為に関することも含む。

7 面子を立てる、面子がつぶれる、というように、第三者がいる場面での体面的部分について表現する機会が多い。中国における「人情」とは人間の基本的感情であり、社会的交換が行われる際に用いられる一種の資源で、個人とその関係ネットの中にいる他者とが互いに遵守することが期待されている社会規範である。中国社会は一貫して「人情」を重視する社会である。人々の日常生活や交際の過程で、「人情」はいろいろな社会資源となっている。例えば、物としての「贈り物」や「お金」などから、無形の「チャンス」や「承諾」といったものまで、様々な「人情」で体現することができる。また、「人情消費」とは、人情における「礼金」の支出と収入のことを指す。

最後に、尚会鵬は、『豫東地区婚礼中の随礼分析』(1996)で、4組の随礼の「礼単」⁸を分析の資料とした。尚によれば、豫東地区⁹の随礼に人間関係は二種類に分けられる。一つは、親族集団の内部関係である。この人間関係の中で礼金は血縁の遠近により金額にも影響している。もう一つは、非親族者間の随礼関係で、礼金は、関係の親密度により金額に反映されている。

上述の文献のほかにも、経済の視点から随礼に注目した者もいる。彼らのほとんどが「人情」を分析の基本概念として、「人情消費」¹⁰の原因、役割、機能などについて研究している。その代表的なものとして、馬・李(2004)および李(2003)によれば、農村住民の人情消費は「社会関係資本」¹¹の構築の一つの手段だという。人情消費は著しい経済的特質を有し、家庭の純収入を必ず減少させ、家計支出の大きな一部になってしまう。しかし、社会関係の獲得という視点から見ると、人情消費は一つの投資と購買であり、その購買手段は「人情」の交換である。人情消費の支出と収入の間には時差があるから、これは一つの「延期交換」、すなわち、「遅延化された交換」である。こうなると、一方は、人情消費の収入が支出より多いことから、社会交換の継続につながり、長期的に安定した人際関係に結びつく。しかし、礼金の交換は、家計収支との関係避けることができないが、経済の領域とは異なる社会的領域もあるので、馬と李の人情消費によるアプローチは、随礼行為が社会的交換行為の中の一形式に過ぎないという特徴を見落としてしまい、礼金の収支における経済性と社会性を結び付けた分析がされていない。

3.2 贈与交換に関する人類学的研究

人類学における贈与交換に関する研究は、周知のように、イギリスの社会人類学者マリノフスキーのクラ(1922)やフランスの社会学者モースの贈与(1925)といった古典的研究以来、日本でも数多くの研究がある¹²。

モースは『贈与論』の中で、贈与交換には「互酬性」という双務的な義務が発生し、そのなかで、対称的に配置されたパートナー間に相互依存関係がみられるが、交換と違い、給付と反対給付の間に厳密な等価性は期待されていないという(モース 2009: 38)。このモースの研究に端を発して、互酬性については、多くの議論が展開された。経済人類学の祖といわれるカール・ポランニーは、社会統合の類型として、「市場交換」、「再分配」、「互酬性」の三つを指摘し、なかでも「互酬性」については、その双務性がほとんど「義務」に近いものであることを指摘する(ポランニー 1983: 90)。

ポランニーの上記の3分類を、「互酬性」の概念で統一的に捉え直して、「一般的互酬性」、「均衡的互酬性」、「否定的互酬性」の3つに置き換えて示したのがアメリカの人類学者マーシャル・サーリンズである。サーリンズの分類でいえば、その等価的性格を色濃くするのは、地縁

8 「礼単」とは祝儀帳で、「礼金」の収支状況について、相手の名前と金額が書いてある。

9 豫東地区は、中国河南省内の鄭州以東地区で、商丘、開封、周口などを含む都市である。

10 本稿の「人情消費」は、相手との人間関係いおいてかかる消費を指し、贈り物や随礼も含まれる。

11 血縁、地縁、社縁などを指す。

12 膨大な数になるので、最近のものからいくつかあげると、伊藤 1995, 1999, 2011; 今村 2000; 成田 2003; 野元 2004; 春日 2007; 小馬 2009; 二瓶 2010などがある。

関係や社縁関係にある顔見知りの者同士の間でみられる「均衡的互酬性」である（サーリンズ 1984：225）。

互酬性を「返礼」という視点で捉え直したアメリカの社会学者グールドナーによれば、返礼については、大まかな等価性しか期待されておらず、返礼の選択は返す側にまかされており、返礼義務の内容についても、必要と状況に応じて変わりうる融通性があるのだという（Gouldner 1960）。

日本における贈与交換に関する研究では、伊藤幹治や小馬徹、二瓶喜博が贈与の本質を当事者間の社会的距離を近づけるのもの、即ち「関係形成的」なものとして捉えてみせる（伊藤 1995, 1998；小馬 2000, 二瓶 2010）。他方、二瓶によれば、贈与交換は、共同体内の関係維持という側面ばかりでなく、交換の当事者間に不均衡を生む交換でもあり、受贈者は何らかの負債感を持ち、それによって心理的に従属的な位置に立たされること、さらに、返礼という行為がバランス上問題になるとしても、中味の等価性よりも行為としての贈与と行為としての返礼が求められることなどを指摘する（二瓶 2010：25-26）。さらに、二瓶は、等価性の拘束から自由な贈与と、等価性の拘束によって返礼される贈与を、それぞれ「贈与」と「贈与交換」として区別し、「現象としては同じようなものであっても、このような概念的な区別をすることによって、贈与が持つ関係形成上のエネルギーと、今日の多くの贈与と行為が持つ市場交換的意味合いへの変化とを理解し整理することができる」（ibid.:27）と指摘する。二瓶は「返礼の等価性」について言及するが、関係形成的な贈与交換と市場交換的な贈与の区分の指摘に留まり、また、現金の贈与交換の問題についての議論はほとんどみられない。

本研究の「随礼」における「礼金」の贈与との関連で最も興味深い研究は、野元美佐の、アフリカのカメルーンの商売民「パミレケ」の金融システムである頼母子講に関する研究である（野元 2004）。その「トンチン」と呼ばれる頼母子講においては、まず、みんなから集めた金を一人の人に与えることから、トンチンはお金の贈与交換であり、贈与であるからこそ相互扶助と考えられている。野元の考察の興味深い点は、これまで人々の連帯を破壊するものとして考えられる傾向にあったお金が、パミレケの事例では、トンチンという頼母子講によって、逆に、お金が人と人をつなぐ道具として用いられること、さらに「経済的利害と社会的利害の両方が分かちがたく結びついている」（野元 2004：365）と指摘する点にある。このトンチンの事例との比較で随礼をみると、随礼もお金の贈与交換という特徴を有する点で共通するが、随礼は、集団の連帯に寄与するというよりは、家族や家計と関係の深いもの、特に家族のライフサイクルにそって随礼、即ち礼金の贈与交換が展開するという点で異なる。

以上の議論から、これまでの贈与交換に関する研究の多くは「モノ」の贈与交換に関するもので、しかもその議論は「関係の形成と維持」という枠組みの中で行なわれることが多かったのに対し、本研究は、その研究対象が「随礼」における「礼金」の贈与にあることから、「モノ」ではなくむしろ「現金」を媒体とした贈与交換に関する研究であり、さらには、現金であることからその担保をめぐって問題化しやすい「返礼の等価性」をめぐる研究と位置付けることができる。

以上のような先行研究を踏まえて、本研究では、中国遼寧省のある農村住民たちが慣行的に

行っている随礼行為が、彼らの日常生活や家計、ライフコースにおいてどのような意味を持っているのかという点について、以下のような分析と考察を行う。

まず、農村住民の随礼行為における礼金の収支状況と、その家庭への影響について明らかにする。次に、その礼金収支のバランスと、家庭間の「贈与交換」関係の変化について考察する。最後に、農村住民が礼金収支のバランスを保ち、家庭の経済状況を保つと同時に、家庭間の「贈与交換」関係を断絶させないようにするために、何が行なわれ、また、どのような改善策が可能かということについて考察する。

4. 調査地の概況¹³

4.1 地理と人口

遼寧省莊河市黒島鎮山南頭村（以下S村という）は、遼寧省東南部地区の1つの小さな村で、遼東半島東南部に位置し、大連市より東北方向に約230kmの距離にある（図1参照）。黒島鎮の地理上の特徴は高い山がなく、丘陵地帯であることだ。また、S村には小学校が一つと農業貿易市場がある。

2007年12月1日現在の人口は、362戸、1,259人で、その内、男性653人、女性606人である¹⁴。県外や省外で仕事をする人が年々増えているなど様々な理由により、現在、S村の常住人口は男性320人、女性433人である¹⁵。

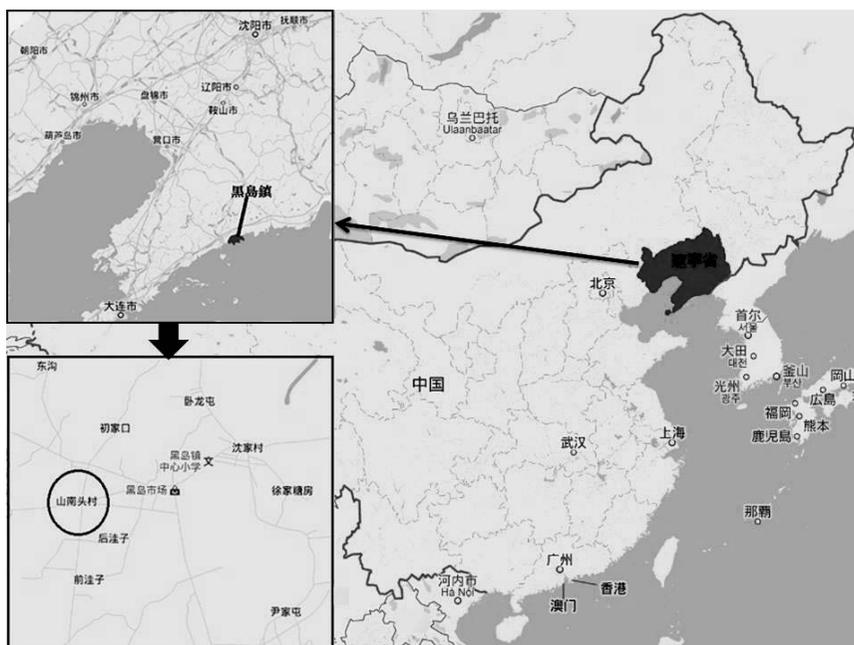


図1 中国電子地図より作成

13 調査は、2008年7月末から9月半ばまで約2カ月間行なった。

14 『庄河市（县）统计年鉴 1997』～『庄河市（县）统计年鉴 2007』を参照。

15 黒島鎮またS村役所資料より作成。

4.2 住民家庭の経済情況

4.2.1 家庭の収支

S村(大連農村)は農業村に属して、圧倒的多数の人は農業収入により生計を立てている。収入は農業を主とし、漁業と観光業を兼業する。農業はおもに稲作や食用菌茸の栽培、漁業は海産物の養殖などである。支出の主なものは、農業への支出(種、化学肥料、農機具、農薬、農業の雇用労働者など)であり、その他、日常生活での支出(衣食住)や重大な出来事での支出(結婚、住居購入、重大な疾病など)である。

S村の1年の農業経済は、春夏の農業投資期と秋冬の農業収益期というパターンが見られる。S村で最も盛んな水稻栽培を例に見ると、農作物の成長に長い時間を要し、収穫は年1回のみで、毎年11月に収穫する。農業収入は年1回、秋の収穫期に集中する。農業への資金と労働の投入は春の耕作から夏までずっと持続し、種、化学肥料、農機具、農薬、農業の雇用労働者などに係る費用が支出に含まれる。つまり、S村の1年の経済は持続的な投入期と年1回の収穫期という特徴を持っている。従って、随礼の観点からみれば、S村の農民たちは、農業支出のみで収益が全くない春と夏の時期においては、借金をして随礼を行うこともある。そして、秋の収穫により冬は経済的に潤うので、春夏の随礼による借金の返済と、正月期を挟んで随礼が盛んになる傾向が見られる。

4.2.2 重大事の支出とその他の支出

日常生活(衣服、食料などを含む)以外にS村民の支出は重大事における支出とその他(主に随礼)の支出に分けることができる。

重大事における支出は、ある特定の期間に発生する大きな支出項目で、長期的に計画して準備しなければならない。たとえば結婚披露宴での支出、住居購入の支出、重大な疾病による支出などである。重大な疾病とは、一般的には1万人民元以上費やす疾病のことを指し、その多くは老年の段階に発生することが多いが、親の医療費を払う責任は子供たちにある。従って、普通は、男女が結婚して家庭を持つと、親は、子供の結婚式や住居の購入といった巨額の費用を要するものに対して、普段から貯蓄をして準備をすることになるが、自分たちの老年期の医療費まで準備することには手が回らないことが多い。そして、親の医療費は、慣習的に、子供たちの責任だと考えられ、実行されてきた。

その他の支出は主に、随礼による支出である。礼金の支出は、前述の重大事における支出(結婚式の支出、住居購入の支出、重大な疾病)と比較して明白な特徴を持っている。

第一に、随礼による支出は、一年(年間)を通して常に発生する支出である。

第二に、随礼による支出は、先行投資という意味合いを有し、将来のある特定の時期に、少なくとも同額のお金が戻ってくる可能性がある。しかも通常このような資金の逆流が同時期に集中していることが多いため、ある時期に、過去に行った礼金のお返しとして逆流するお金が巨額になる場合もある。

第三に、随礼による収入は、投資の場合とは異なり、随礼として過去に支出したのと同額が期待されていることである。このような支出は農業投資とも、また住居購入のような不動産投資とも明確に異なる投資の一形態と見ることができよう。

以上、調査地の基本的な状況を概観してきたが、以下では、現地調査をもとにいくつかの随礼の事例紹介と分析を試みる。

5. 農村住民の随礼に関する事例

5.1 随礼の形態と内容

農村部の随礼は、地理的な範囲と社会ネットなどの要素により制約される。そして、外来文化の流入に対してあまり影響を受けないなどの要因で、農村部の随礼は都市部よりも、心理的・情感的側面が表れやすい。本節では、現地調査の資料に基づき、現地の随礼の形態と内容などについて、いくつかの事例を通して説明する。

事例 1

Wさんは、Bさんとは、以前から同じ村人同士という関係にあった。Wさんの結婚式に、たまたまBさんは別の都市に滞在していたため直接随礼をすることができなかった。Bさんは一週間後に地元に戻ったが、WさんのところへBさん本人が随礼に行かずに、Bさんの妻が代理として行き、200元を礼金としてWさんに贈った。BさんとWさんの家は直線距離にして100メートル以内と近い距離範囲にありながら、Bさんはその後も、Wさんには特に挨拶をしたわけではなかった。その後、Bさんの妻が子供を出産した際に、今度はWさんの妻が、その出産見舞に参加して、Bさんの妻に礼金として200元を贈った。

一般に、礼金支出する 과정에서、一番多額の礼金を必要とする儀式は結婚式である。また、S村の出産見舞礼金支出の額は、ほとんどが100元前後である。Wさんが200元を返礼したのは、Bさんからの200元の礼金を早めに返したいという気持ちからのものであると考えられる。すなわち、Wさんは、Bさんとは長期的な人間関係を維持したくなかったのだろう。

上述の事例では、長期的な関係を維持する方法は、ただ双方から礼金を授受することだけではなく、相互に、様々な配慮をしあわなければいけないことだ。事例1のBさんが、Wさんの結婚式に参加しなかったことと、村に戻ったときにも挨拶もしなかったことが、二人の関係を悪化させている原因の一つと考えられる。それと、Wさんは、「返礼」をするとき、Wさん本人の代わりに、妻を出席させたことは、本人の不満の間接的表明と見ることができる。

事例 2 妊娠中絶の事例

2008年4月終り頃に、Xさん（26歳、既婚女性）が、中国一人子政策により人工流産¹⁶の手術を受けた。その際にXさんに対して村の女性たちから随礼が行われた。随礼の参加者は全て女性（女性だけの随礼）で、その時の随礼金額は50～100元前後であった。1998年以前は、随礼は、ほとんどの場合、「お金」ではなく、例えば、卵、地鳥などのような「物」であった。

16 人工流産：妊娠中絶、人工的な手段（手術または薬品）を用いて意図的に妊娠を中絶させること。

この事例では、結婚式や誕生日のお祝いなどのときに見られる宴会はなかった。随礼の挨拶の後、村の女性たちは、各々、自分の家に戻った。

中国の一人子政策により、1980年代以降に人工流産と人工絶育¹⁷が随礼の一つの機会となった。特に、1980～90年代前後に地方政府の強制避妊手術政策により、一子を持っている30、40代前後の多い女性が避妊手術を受けたことである。

避妊手術を受けた人は、その手術の間に体力が落ち、病気にもかかりやすい。手術後の休養不足と栄養状態がよくないことが原因の一つであったようだ。手術をまだ受けていない人たちが、避妊手術を受けた女性たちを慰めるために、80年代以降に避妊手術の随礼を始めた。しかし、強制避妊手術政策に対する地方からの反対や圧力で、90年代から現在まで避妊手術政策が緩和され、そのかわり、違反者に対しては大きな罰金が科せられるようになった。もし、罰金を払わないと強制避妊手術を科せられる。

事例3

Gさんは、Kさんのお父さんの60才の誕生パーティーに50元を随礼した。その一週間後に、Gさんの妻は妊娠中絶手術を受けた。Kさんは妻と相談して、Gさんとの随礼の返礼期間が短すぎるので「カネ」で返礼できないので、Kさんの妻が卵、地鳥など、60元の贈り物を買って、Gさんに贈った。

事例3のように、2人が随礼を贈答し合う場合、期間が短いので、すぐに50元前後のカネで返礼すると、相手に借金を返す感じを与えてしまうかもしれない。だから、贈り物をするので、相手にいい感情を与えられたとKさんは説明した。また、女性はその随礼において、例えば、「礼単」¹⁸の管理や、宴会の有無の決定等において大きな役割を持っている。特に、あまり重要ではない随礼を行う場合は、女性だけが出るようになってきている。

事例3では、50元の礼金をもらったが、なぜ100元とか、100元あたりの贈り物をしなかったのだろうか？

理由の一つとして考えられることは、自分の家庭に負担をかけないという経済的理由であり、もう一つは、相手に対して、返礼を強いるような圧力を与えないようにとの配慮からであろう。以下は、このことについて、村の年配者Pさんに聞いた時の話である。

「もし、あなたが返礼する金額が、もらった金額より多かったとしたら、相手に負担をかけるかもしれない。相手が次の返礼の際に、もっと金額を増さないといけないと考え、もしそのときに、彼の生活が窮乏しているなら、あなたの礼金は恨みを買うことになると思う」。

上の事例から、随礼で贈与された礼金を返礼する際、金額を大きく増やすと、相手に返礼の圧力をかけてしまうことになるので、一般的には、金額を増やさない方がいいということに

17 人工絶育（避妊手術）：卵管結紮術、女性のパイプカット、避妊効果が高い。手術を行うには、麻酔が必要だが、危険性も高い。

18 「礼金」の金額を記入する帳面である。

なる。

以上、農村住民における随礼の内容と形態について、調査地で入手した資料に基づいて説明した。調査地の随礼の内容と形態の分析を通して言えることは、現地の人々の礼金の授受の過程においては、感情や心理的要素が、人々の随礼の行為のあり方に影響しているということだ。また、随礼および随礼を行う過程での女性の役割などについても、興味深い事実が明らかになった。さらに、礼金の授受における過程で、お互いに、相手に対して心理的圧力をかけないようにといった配慮がなされていることについてもわかった。

次節では、礼金の収支関係が、農村住民の家計や家庭生活にどれほどの影響を与えているのかという問題についてみることにしよう。

5.2 家計として礼金収支とその影響

5.2.1 礼金の金額

前節で述べたのと同様な随礼の現象については、特に、随礼の金額の変化に対する研究が、全国各地の農村部や都市部におけるものや、その他の多くの機関と個人の視点からのものがある。先述した尚会鵬は、その著『河南省東部地区の婚礼の中の随礼現象分析』のなかで、「随礼の金額が増えている。随礼は貨幣化の傾向に変わっていく。」(尚 1996 : 112) とで述べている。

そして、閻雲翔もまた、「1990年に、52%の下呷村民の随礼に対する一年間の費用は500人民元を超えた……、大勢の家庭にとって、500人民元の支払いは家庭の純収入の20%を占めた」(閻 2000 : 74) とその著『礼物の流動』のなかで述べている。

「唐山市統計局調査資料」によると、唐山農村では2000年に年間1人当たり随礼の支出が123元に達し、1995年と比べて61.8%増加した。1985年から2000年までのこの市の農民は1人当たりの年間の純収入は3.42%しか増えていなかったが、1人当たりの1年の随礼支出は20.5%も増加した。支出は純収入の増加の割合よりも相当高くなっている¹⁹。

S村の状況はどうであろうか。一方、現地調査で入手した資料を分析すると、随礼による支出のとは別に、それまでに贈与した随礼の返礼の逆流による高額収入が含まれていた。

事例 4

家庭 A : 2000年以前には、親しい親戚でも1回あたり50~100元であったが、今はすべて300~400元である。遠い親戚の場合は通常100~200元、普通の友達はずべて100元、特別関係者は300~400元である。家庭の1年の収入は10,000元ぐらいで、毎年の礼金の支出に2,000~2,500元を当て、随礼を行うことが多い年は、更にもっと高くなる。

家庭 B : 上の娘の1992年の結婚式では、随礼として3,000~4,000元をもらったが、披露宴は1,000元かかった。息子の1995年の結婚に際しては、随礼として9,000元をもらったが、披露宴では3,000元かかった。近年、毎年の農業収入は12,000元ぐらいで、農業費用の支出は毎年

¹⁹ 『唐山市統計年鑑 1995』 ~ 『唐山市統計年鑑 2001』を参照。

5,500元ぐらいであり、礼金として支出は3,000元ぐらいである。

この2つの家庭から提供される資料を見ると、現金形式の随礼は絶対的な地位を占めており、また、平均的にS村の農民の礼金支出はおよそ家庭の収入の20～25%ぐらいまでを占めている。随礼の支出がこのように高い割合になっているという事実の重要な意義は、それが、S村の住民の実際の日常生活や生産活動に少なからぬ影響を与えているということである。以下では、こうした礼金の支出と収入の実態が農村住民の生活にどのような影響をどの程度与えているのかということについて説明したい。

5.2.2 礼金支出の影響

S村の住民にとって、その随礼の支出の状況と特徴が、彼らの生産活動と生活にどのような影響を及ぼしているのだろうか？まず、現地調査資料の事例から説明する。

事例5 (40代から60代の男性が4人と女性が5人)

「礼金を支出することは重要なことだよ。火事を消すときのように、遅らせることができない。ほかのことは遅くなくてもかまわないけど。例えば、服や靴などを買うといった日常の消費は遅くなくてもね。もし、そういったときに、農業生産にさらなる投資が必要となれば、しかたなく、ローンに頼らなければならないよ。」

しかし、実は調査地であるS村では、ローンや借金は簡単にできることではない。毎年の家庭収入の20～25%ぐらいの資金が長時期にわたって継続的に流出することは、家庭の消費生活と農業への生産への投資が制約されることになる。天に任せて生活する農民にとって、彼らの収入源は有限で、多額の現金の支出は彼らの生活と農業生産の発展に重大な影響を及ぼしている。

長期的な観点から見ると、礼金を支出することは、家庭において、経済的その他のいろいろなやり繰りに重大な影響を与えるであろう。家庭のやり繰りを決めることは、主に随礼を行うことと関連している。例えば転勤、結婚、引っ越しなどである。ここで、Rさんの事例を挙げて説明する。

事例6

Rさんは公務員であり、妻は家の10ム²⁰の広さの土地を耕作している。Rさんには2人の息子がいて、長男は結婚して、工場で仕事をしている。長男の妻はバイトをして、10歳の孫は小学校に通っている。次男は上海で仕事をしているが、様々な理由で晩婚につながっている。Rさんと妻はだんだん歳を取ってきて、Rさんの健康状態もあまり良くない。収入も低くて、2人の息子たちは、父親であるRさんが仕事を辞めたら、両親の生活や、その他いろいろな費用を負担すると提案した。しかし、Rさんと妻は反対した。その理由は、やはり礼金の収支状況

20 面積単位。1ムは666.67㎡である。

と関係していた。

長男は11年前に結婚して、次男はまだ結婚してない。この10数年来、2人は親戚、町内の人、職場の同じ部門の同僚に対して、すでに多額の礼金を支出したが、Rさんは、次男の結婚式の際に回収することを期待している。この時もRさんが職場の所属する部門を辞職すると、同じ部門の同僚たちは、「去った人には冷たくなる」の言葉通り、Rさんに対して疎遠になることが懸念され、Rさんと息子二人はどうしたものかと考えている。

県外などへの転勤や引越しが多くなってきた結果、随礼における「互酬性」の実現が困難になってきており、随礼を通して逆に人間関係が悪化するケースがみられる。また、次に見るように、家庭の礼金の収支状況で、家庭の社会関係の状況がわかる。例えばいくつかの状況が変わったとしても、人々はすぐ随礼活動から撤退することはそう簡単にはできないと考えている。その理由として、家庭はすでに随礼ネットによって長期的に礼金支出を行ってきており、これまで払い続けてきた礼金がいつか収入として逆流するという期待感を強く持っている。この時、家庭はもう随礼の渦中に入ってしまったのだ。当事者はその渦中に落ちてしまうと、もはや自力で抜け出すことができないのである。もし、このときに、随礼ネットから退出すると、後述する家庭の「随礼のライフサイクル」も終わることとなる。

5.2.3 礼金収入の家庭への影響

礼金収支の時点で見ると、礼金の支出には長期的・持続的な特徴があり、礼金の逆流は一時的・集中的な特徴を持っていることがわかる。そして、この集中的な礼金の回収は家庭に対していろいろ重要な役割をはたすことができる。陳建功はその著『礼帳と森林区の住民の社会ネット』の中で、「随礼は若い人にとっては貯金の性格を持っていて、彼らは随礼を行う時は、彼ら自身にこのような考えがあるかどうかに関わらず、それは積立預金に類似していて、結婚式などで回収することができる。」(2008:136)と述べている。

S村にも似たような言い方がある。「随礼は、他人に利息なしの借金をしたり、或いは利息なしの貯金をすること」。貯金は、将来のある種の予測できないリスクあるいは将来の予測可能な支出のために早めに用意することである。S村の随礼活動における、この必然的な支出は、家庭としては重大なことである。例えば、結婚式の費用(披露宴)、家を新築する(あるいはマンションを買う)費用、学校(大学進学と海外留学等)の学費などである。

事例7 (Mさん:50代の女性)

「Mさんの娘はすでに結婚年齢に達していて、随礼活動にも積極的に参加しているので、将来、娘が結婚する時にはお金と「人情」の二重の支持を獲得することができる。農村ではこのような重大事(結婚することなど)には多額の金を必要とするが、結婚式などでは随礼の逆流による現金を受け取ることで、その支出を助けることができる。」とS村のMさんは教えてくれた。

貯金と比較すると、随礼に伴って入ってくる現金は、家庭にとって「貸借」の機能を有する。現地調査を通して、村のある住民から、そのような「貸借」の事例を知ることができた。

事例 8

S村には省外から引っ越して来た人が多い。そのうちの一人、Wさんは南から引っ越して来た。Wさんの故郷は距離的に非常に遠い上に、家の経済状態はよくない。彼はS村で結婚したが、妻にしたい女性の出身はS村ではないので、その結婚は難しいと考えている。その結婚が困難だと考えられる理由の一つは、Wさんが現地に来てからの年数が少なくて、親戚や友人などの社会ネットの範囲も小さく、そのため、結婚式に来る人の数も少ないことが予想される。もう一つの理由は、結婚式に多額の費用がかかることである。このような理由で、Wさんは、以下のようなことをやってきた。Wさんは、多少付き合いのある知人や町内の人など少しでも関係のありそうな人すべてに、自分の結婚式に参加してほしいこと伝えた。Wさんは、「今は私に礼金を貸しておいて、将来あなたの随礼活動があるときにまた返すよ」と言ったという。

礼金の収支の過程で、随礼の収入は1つの時点でみると、一時的に「随礼式」をやっている家庭に流れ込むこととなり、その後の数年を経て、今度は逆に少しずつ支出されていくことになる。

農村家庭にとっては、結婚式の時の礼金収入は家庭の年収の1倍～1.5倍の現金に相当して、極めて大きな資金の流入となり、家計の大きな助けにつながる。このことは、家庭の収支体系に対して大変重要な意味を持ち、ある意味で民間の相互扶助作用と同じ性格のものであるといえる。そして、長期的な視点から見ると、S村の礼金は、家庭においては一つの大きな資金循環のサイクルに位置付けられる。その特徴と規則は家庭の「随礼のライフサイクル」としっかり結びつく。

5.3 循環する礼金

5.3.1 家庭の「随礼のライフサイクル」

家庭の「随礼のライフサイクル」は、主に、一つの家庭が有する社会的関係と社会的関係網(社会ネット)の融合したものであると考えられ、家庭として随礼ネットに参入してから退出するまでの期間を、筆者は家庭の「随礼のライフサイクル」と呼ぶことにする。

S村の中では、家庭の社会的状況は、主に一つの家庭と外部との随礼関係の中で表現された。S村の随礼ネットに参加することは、一人あるいは一つの家庭が村のその他の住民と取り持つ社会関係の構築と維持、および、それをより広範な社会ネットと結び付ける大切な手段となる。「機能」の視点から見ると、義務的な贈与・返礼という行為は、農村住民の間に一つの「社会ネット」を養成、維持、拡大させる重要な形式である。

S村の調査から、随礼ネットに参加しない人は「絶礼」²¹といわれ、陰でとりざたされている。礼金をもらっても「返礼」しないと、「人情がわからない」、「現地の社会生活に溶け込まない」といったマイナスの言説がかけめぐる。

S村の中で、随礼ネットは婚姻の前に拡大するかもしれないけれども、一般的には個人が家庭をつくる時期に参入を開始し、子供たちが結婚した後や、自身が経済力を喪失した場合に退

21 絶礼：随礼ネットに参加しない人、また「礼金」をもらって、「返礼」しない人およびそうした家庭の呼称。

出することになる。

S村の若者の結婚年齢は大体23～24歳位である。就職してから結婚するまでの間に参入する随礼ネットの範囲は、学生時代の同級生と会社の同僚の中で発生する規模の小さなネットである。

一つの家庭が成立した後に、随礼ネットに参入する理由としては、自分でその必要性を認識するか、町内の人々からの道徳的評価を求めて入る、社会関係の維持、経済力の強化などがあげられる。時の経過とともに、子供たちがすべて結婚し独立すると、家庭としてはだんだん随礼ネットから退出することが考えられ、随礼活動に参加することも減少していく。家庭名義での礼金が逆流するチャンスもだんだんと少なくなる。そうすると、社会関係の維持は、すべての子供たちに転嫁されて、一つの随礼関係が終わることは、家庭としての「随礼のライフサイクル」も終結したことを意味する。

礼金の出入りは、家庭の「随礼のライフサイクル」と同時に発生している。この「ライフサイクル」のスパンは通常の場合は40年ほどかかることになる。この長期間の礼金収支の過程で、いろいろな随礼の形式が出てくる。たとえば、結婚、出産、引っ越し（家の新築や購入）、子供の進学（大学、留学など）、老人の誕生祝い（66歳、80歳）、葬式などである。それぞれの家庭は生活環境も異なるため、家庭としての随礼行為もそれぞれの家庭によって違ってくる。たとえば、子供の数が多い場合は、子供たちの結婚式によって礼金収入も多く入ってくる。また、老親がいない場合は、葬式の礼金収入が得られないことなどが考えられる。

随礼ネットに入っている家庭の視点から見ると、礼金は長期間にわたり出入りして、家庭と家庭の間を循環・流動していく。現地調査による資料を分析すると、家庭の礼金の収支循環は以下のような特徴を持っていることが判明した。

(1) 随礼に参加する人が礼金収支の「互酬性」のルールを守れば、家庭の「随礼のライフサイクル」の時期内に、随礼の支出と収入の額は同じになると考えられる。礼金収支の双方は、礼金を占有する時期的な差異が一時的な資金の使用時期の差異となって現れる。

(2) 礼金の支出と収入の時間的間隔が長くなると、家庭に二つの影響を与える。一つは、礼金の長期的かつ継続的な流出は、家庭の経済状況を悪化させる原因の一つである。二つ目は、礼金の長期的間にわたる流出と集中的な逆流の間隔が長くなると、家庭と社会ネットの繋りが終結する可能性が高くなると考えられる。

以上の2点から、家庭の礼金の収支循環の特徴がわかり、礼金は、家庭に対して様々な影響を与えていることがわかる。例えば、確かに礼金は一時的に返ってくるが、相手のこれからの家庭状況（子どもの年齢や親の身体状況など）を考慮して次に贈る礼金を準備しなければならないだろう。そうすると、贈与交換において循環している礼金がすべて、家庭の可処分所得に組み込まれるということはないと考えられる。また、現地調査の中で、随礼の参加者から「礼金の収支バランスを保つことができない」という声を聞いたが、そのバランスの格差を、筆者は「礼金収支の不均衡」と呼ぶことにし、次に、このことについて考察する。

5.3.2 礼金収支の不均衡とその改善策

現地で調査しているなかで、随礼を行った人々から、「礼金収支の均衡がとれていない」と

という話しをしばしば聞いた。これは、家庭を循環する礼金の収支の視点からみると、随礼の資金が、礼金収支の過程でバランスが崩れてしまったことをいう。以下において、この礼金収支の不均衡の事例をいくつか紹介してみよう。

事例9 住民Lさんの事例

Lさんは40代の女性で専業主婦、夫はサラリーマンで、二人の間には、女子高校生の子供が一人いる。XさんはLさんのすぐ隣に住んでいる50代後半の女性、夫は公務員で、既婚の息子が一人おり、大都市で就職して暮らしている。以下はインタビューしたLさんの話しである。「Xさんの両親が亡くなった時、私は、それぞれに100元ずつ礼金として贈った。彼の子供が大学に入った時と、結婚した時にもそれぞれ100元と200元を贈った。もし、私の娘が結婚する時に、彼は私500元の礼金を贈るとは思えないけれども、彼に500元を強制することもできないだろう。彼の息子は大都市で就職しているから、恐らくXさん夫婦も大都市に引っ越すかもしれない。そうになると、わたしの贈った礼金は返ってこないだろう。礼金を返すかどうかは先方が自分で判断することなので、人と人の付き合いは複雑な問題だ。私としては金のことは別にいいけど、相手との付き合いが一番大事なことだよ。」

事例10

Cさんは50代の男性公務員である。また、Yさんは70代の男性で元公務員で、Cさんの同僚である。Lさんの話はこうである。「礼金を贈り、返す行為は、バランスをとることはできないだよ。例えば、私の元の同僚のYさん。彼が50代のとき、私はまだ30代であった。そのとき、彼にはいろいろな随礼が出てきた。彼の子供の結婚や、彼の両親が亡くなった時などに、私は礼金を出さないといけないだろう。でも、私が50代になったとき、彼はもう70代だ。自分の生活も厳しくなるので、「返礼」の能力はないだろう。子供もそばにいないし、Yさんに返礼を強いることもできないだろう。」

上述により、家庭の収支循環の視点から見ると、このような現象は「礼金収支の不均衡」と呼ぶことができる。すなわち、一部の礼金は、「礼金収支」の過程で、相手の家庭の中に滞留したまま返礼されず、従って「収支のバランス」を保てなかったのである。言いかえれば、A家庭からB家庭に流出する礼金が、B家庭からA家庭に流出する礼金よりも多い場合である。相手の家庭との礼金収支の時期は、長期間の間隔が開くと、両方の随礼関係或いは付き合い関係が中絶される可能性がある。

現地の住民にとって、礼金収支の不均衡を予想して考えることは、最大の利益獲得を目指すとともに、損失を極力避けるための方策でもある。そして、礼金の収支循環の過程で、農村住民は、礼金が逆流する周期の長さから自分の家庭生活の向上に有利な方策を決める。ここで、以下の二つの事例から説明する。

事例11

Sさんは50代の男性サラリーマンで、妻は専業主婦、長男は20代既婚で子供一人。長女は中

学生である。Sさんの話によれば、「両親が5年前に亡くなった。その後に、長男が結婚して、長男の息子が生まれた。だから、自分はもう礼金の支出をしなくてもいいんじゃないかと考えている。娘はまだ若いし、大きくなってから礼金を支出しても遅くはないよ」ということだ。

事例12

Qさん：50代、女性で、夫はサラリーマン、男の子は高校生。以下はQさんの話である。「今は、老親がまた生きているから、なにか随礼を行いたい。礼金の逆流も考えられる。もし老親がいなくなったら、その老親の社会関係における随礼ネット圏に支出した礼金が逆流することはないだろう」。

事例13

Zさんは60代の男性で、妻は専業主婦。長男は20代で、省外で就職している。長女は20代で結婚して、省外に引っ越した。「子どもが近くにいないし、私は2～3年後に定年になる。定年後に子どもたちのそばに行きたい。しかし、近年、この村での礼金の支出は多額であるので、定年までに礼金が返ってこない。この悩みを子どもたちにしゃべったら、息子は今年の私と妻の誕生日に極めて盛んな宴会を行った。その契機で一部分の支出した礼金が戻ってきた。自分はこの礼金の回収方法には賛成しないけど、村落中のほかの人々もこのやり方でやるはずである。」

事例11では、家庭として長期間、随礼を行うチャンスがないと考えて、礼金の支出を調節するという方法を選んだ。これは、家庭の現金の流出が早すぎることを考えて、家庭の経済状況を悪化させないような方策である。また、礼金が逆流しないという可能性も考えられる。

事例12、13では、家庭から長期間にわたって礼金が流出したり、あるいは礼金が逆流しない可能性が予想されるとき、家庭は、礼金が逆流するチャンスをつくり出す方策に向う傾向がある。随礼関係が中断され、礼金が逆流しないという危険性を避けようとする個人的な「打算」の方策である。

以上、述べてきたように、S村の住民たちは礼金の収支間隔の期間が長くなると、家庭に二つの悪影響を与えるということに対して、以下の方策で対応することがわかった。

一つは、自分の家庭の随礼を行うことが少ない時期には、他の随礼活動に参加することも減らすこと。

二つ目は、新型の随礼を始めて、礼金収入のチャンスを増やして、礼金が一方向的に流出する可能性を防止すること。

三つ目は、随礼を行う時期を繰り上げる（早めにする）ことで、流出している礼金を早めに逆流させることができること。

農村住民の随礼行為は、「心理的」、「互酬的關係」、そして「個人的な打算」という3つの要素の影響を受けている。心理的要素は、「礼」文化からの影響であり、互酬的關係は、随礼の

方向性を導くナビ機能があり、住民の「打算」は、随礼の具体的方策の選択に導くことである。

6. 考察

以上の事例からわかることは、随礼の対象が、モノから貨幣への変遷が見られるものの、「随礼のライフサイクル」で見たように、関係形成的な贈与交換として出発しつつも、永続的な関係の構築に向けたものというよりはむしろ、家庭のライフコースの時々の規定され、場合によっては社会関係ネットからの撤退も可能なものである、ということである。また、礼金の長期的かつ継続的支出は家庭の経済状況や家庭間の随礼関係を悪化させるなどの悪影響をもたらす可能性が高くなる。つまり、随礼という贈答については、均衡性と不均衡性があるからこそ、人々は礼金の収支過程でバランスが崩れてしまわないように、さまざまな方法で贈答関係の断絶の危険を減少させようとしていると見ることができる。その意味で、贈与交換としての随礼は、これまで人類学の贈与交換に関する多くの研究で議論された関係形成的な側面だけでは捉えることができず、むしろ、将来への経済投資といったその経済合理的側面にも注目する必要があるだろう。

伊藤は、贈与交換の均衡や不均衡に関して、「等価性」は、贈与交換の分析枠組みとしては有効かもしれないが、そのメカニズムを分析するうえで、かならずしも適切な概念とはいえず、むしろ、均衡と不均衡という対概念のほうがより有効であり、贈与交換の世界は「均衡と不均衡の弁証法的関係」を繰り返していると指摘する（伊藤 1995：63-73）。これを随礼との関連で述べるならば、随礼は当初はモノの授受であり、そこには融通性が存在したが、モノから礼金に代わるにつれて、融通性が後退し、より等価性が求められるようになったと言える。そして、随礼において、贈与された礼金を返礼する際、金額を大きく増やすと、相手に返礼の圧力をかけてしまうことから、一般的には金額を増やさずに返礼したりする事例などにも、等価交換の性質を見ることができる。伊藤の等価性に関する議論はあくまでもモノの贈与交換を念頭に置いたものであり、現金を媒体とした贈与交換についての突っ込んだ議論は見られない。

二瓶は、等価性の拘束から自由な贈与と、等価性の拘束によって返礼される贈与の概念的な区別をすることで、「贈与が持つ関係形成上のエネルギーと、今日の多くの贈与行為が持つ市場交換的意味合いへの変化とを理解し整理することができる」（二瓶 2000：27）と指摘した点は卓見と言えるが、まさにその贈与行為の持つ「市場交換的意味合いへの変化」の典型である「現金を媒体とした贈与交換」という問題については、伊藤と同様、二瓶にもほとんど踏み込んだ議論がみられないのが残念である。

互酬性は、中国の礼金の収支体系の中に一つの重要な役割を占めつつ、長期的視点から見ると、大多数の随礼行為は、返礼の責任によって支えられている。随礼の貨幣化ともいべき礼金の交換は、S村の人々をにとっても、重要な関係形成的手段であることには変わりない。

また、野元美佐が報告したアフリカのカメルーンの小売民「パミレケ」の金融システムである「トンチン」と呼ばれる頼母子講（野元 2004）は、個人的で利己的な貨幣が集団的資源としての貨幣へと意味を変えると見る点で、「現金を媒体とする贈与交換」の数少ない事例に関する優れた研究であるが、「トンチンという頼母子講によって貨幣が人と人をつなぐ道具とし

て用いられる」(野元 2004 : 365) というように、彼女の考察は、従来の「関係形成的」な贈与交換論の枠組みを超えるものではない。随礼も貨幣化と貯蓄という特徴を有する点で共通するが、野元のトンチンと筆者の随礼の最大の相違は、随礼が個人的なものというよりはむしろ、家族のライフサイクルにそって展開していくという点や、随礼の収支バランスが困難であるということなどから、随礼には関係の形成・維持的側面ばかりでなく、関係からの撤退や崩壊といった側面も有する、という点にあると言える。

7. 結論

今日、経済成長著しい中国では、礼金の額も年々増大し、随礼の経済的意義がさらに人々の注目を集めている。本研究は、中国国内における随礼行為に関する諸研究を振り返った上で、中国の農村部における随礼に関する事例を記述・分析し、その農村住民の随礼行為を、経済人類学における贈与交換の研究の枠組みの中に位置付けて考察することを試みたものでもある。

本研究では、まず、随礼において循環する礼金は、短期的にも長期的にも、家計からのお金の一方的流出と集中的逆流という循環が見られ、家計における意思決定に大きな影響を与えていることを見た。

次に、随礼関係の中で礼金の収支の特徴および家庭に対する影響に関して、礼金の支出が家庭の生産と消費を大きく制約していることや、家庭の「随礼のライフサイクル」における重大事項(新築、進学、引っ越し等)の意志決定にも大きな影響を及ぼしていることを明らかにした。随礼のもう一つの側面は、礼金の集中的な逆流が、家庭の経済状況の改善に効果的に機能することである。

最後に、家庭の視点から随礼関係の中の礼金の循環過程およびその特徴に関して、循環の過程で、礼金の長期的かつ継続的な流出は家庭の経済状況を悪化させ、家庭間の随礼関係を断絶させる可能性が増す。こうした状況に対処するために、人々は、実に様々な方策を試みていることを明らかにした。

中国大連地方の農村部の随礼慣行は、時代の変遷とともにモノの贈与から礼金の贈与へと急激に変化してきたが、我々は、礼金の贈与交換というまさにその随礼行為そのものに、農村住民が担保している倫理道徳観と経済的「打算」の均衡と不均衡の実態を垣間見ることができる。

以上、本稿では、中国農村部の住民の随礼における礼金収支の循環が家庭に与える影響について、中国「礼」文化を背景とした倫理的道徳的要素を結び付けて随礼を行う人々は、随礼関係と調和する経済合理的方策を選択していることを指摘した。

8. おわりに

本研究の目的は、中国の農村部における随礼の現状と、随礼関係の中で礼金収支の特徴および家計への影響、家庭の収支バランスの保持の実態について見た上で、家庭間の随礼関係の断絶といった悪影響を回避するために、どのような改善方策がとられているかを明らかにすることであった。また、本研究の人類学的意義としては、従来の贈与交換の研究に、「随礼」とい

う「現金の贈与交換」に関する新たな事例を加えたことで、今後の経済人類学における理論的研究に何らかの貢献ができるのではないかということにある。最後に今後の課題に言及して本稿を閉じることにしたい。

第一に、随礼の参加者の若年化の影響について（例えば、学生など、収入のない若者たちも随礼ネットの中に入ってしまい、このことが、さらに家庭の経済的な負担を増加させているのではないだろうか）、第二に、当事者双方の社会的地位に差異（例えば、一般住民と村長）がある場合に、礼金の贈答に不均衡が発生する可能性についての検証、第三に、物価が高騰しつつあるなかで、祝儀の会員制化の実例あるいは可能性²²についての探求、第四に、農村部だけではなく、都市部へ調査範囲を拡大して、随礼の新たな事例を掘り起こすことによって、その実態の解明とさらなる一般化を試みることで、などがあげられる。

参考文献

- 伊藤幹治 1995 『贈与と交換の人類学』 筑摩書房。
- 同上 1999 「贈与と交換からとらえた世界」 『国際交流』 21(3), pp.2-9.
- 同上 2011 『贈答の日本文化』 筑摩書房。
- 今村仁司 2000 『交易する人間 贈与と交換の人間学』 講談社。
- 閻 雲翔 2000 『礼物的流动—一个中国村庄中的互惠原则与社会网络』 (『贈り物の流動-中国村落中の互酬と社会ネット』) 上海人民出版社。
- 春日直樹編 2007 『資源人類学 5 貨幣と資源』 弘文堂。
- Gouldner, Alvin W. 1960 “The Norm of Reciprocity: A Preliminary Statement”, *American Sociological Review*. 25(2), pp.160-177.
- 小馬 徹 2000 『贈り物と交換の文化人類学：人間はどこから来てどこへ行くのか』 御茶の水書房。
- 尚 会鵬 1996 「豫東地区婚礼中の“随礼”現象分析」 (『豫東地区婚礼中の随礼分析』) 『社会科学研究』 6, pp.106-112.
- サーリンズ・マーシャル 1984 『石器時代の経済学』 (山内 昶訳) 法政大学出版社。
- 鄒 昌林 2000 『中国礼文化』 社会科学文献出版社。
- 陳 建功 2008 「礼帳和森林区住民的社会关系网络」 (『礼帳と森林区住民の社会ネット』) 『現代経済』 10, pp.135-137.
- 成田善弘 2003 『贈り物の心理学』 名古屋大学出版会。
- 二瓶喜博 2010 「社会的・文化的資本としての地域通過 - 贈与が生む心地よい負債感と関係形成・維持 -」 『亜細亜大学経営論集』 16(1), pp.23-32.
- 野元美佐 2004 「貨幣の意味を考える方法：カメルーン、バミレケのトンチン（頼母子講）に関する考察」 『文化人類学』 69(3), pp.353-372.

22 将来的には、礼金が、現金からクレジット・カードでの支払いに変わっていくことも予想できる。もしそうになると、両者の間の関係がただの「勘定」や「支払い」といった「金銭」関係になってしまうことが懸念される。

- ポランニー, カール 1983 『人間の経済 - 市場社会の虚構性 - 』(玉野井芳郎, 栗本慎一郎
訳) 岩波書店。
- 馬春波・李少文 2004 「农村人情消費状況研究 - 鄂北大山村調査」(「農村人情消費状況研究 -
鄂北大山村調査」) 『青年研究』 12, pp.17-20.
- マリノフスキー, プロニスラウ 1967 (1922) 『西太平洋の遠洋航海者』(寺田和夫・増田義郎
訳) 中央公論社。
- モース, マルセル 2009 (1925) 『贈与論』(吉田禎吾・江川純一訳) 筑摩書房。
- 李 沢厚 2003 『中国古代思想史論』(『中国古代思想史論』) 天津社会科学出版社。

参考資料

- 『現代漢語辞典』第5版(2005), 商務印書館。
- 『庄河市(县)统计年鉴 1997』~『庄河市(县)统计年鉴 2007』1997~2007 内部資料 庄
河市(县)统计局。
- 『唐山市统计年鉴 1995』~『唐山市统计年鉴 2001』1995~2001 内部資料 唐山市统计局。
- 『中国统计年鉴 2008』2008 中国统计出版社。
- 中国電子地図 <http://www.tcmmap.com.cn>